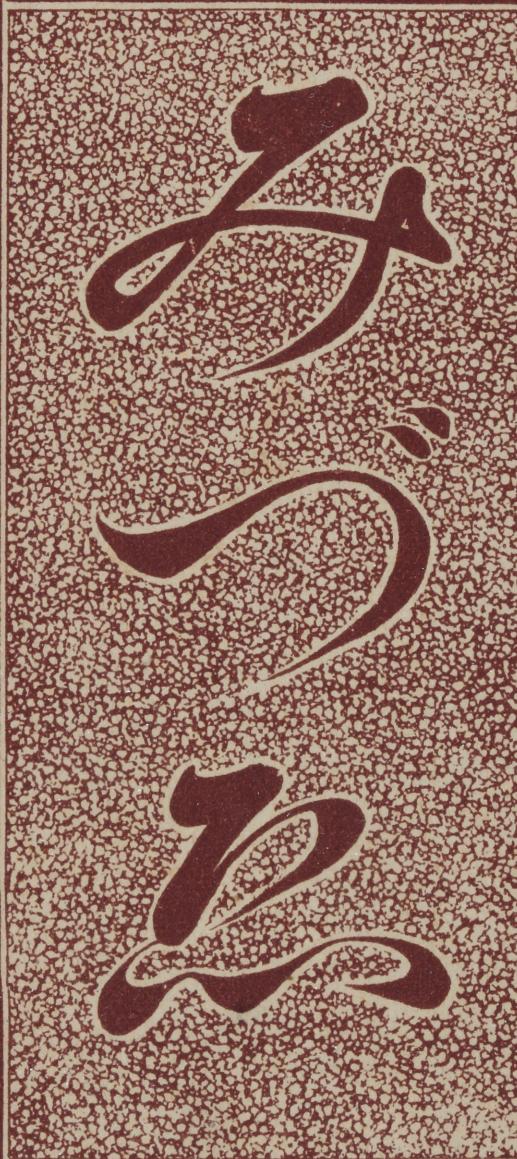
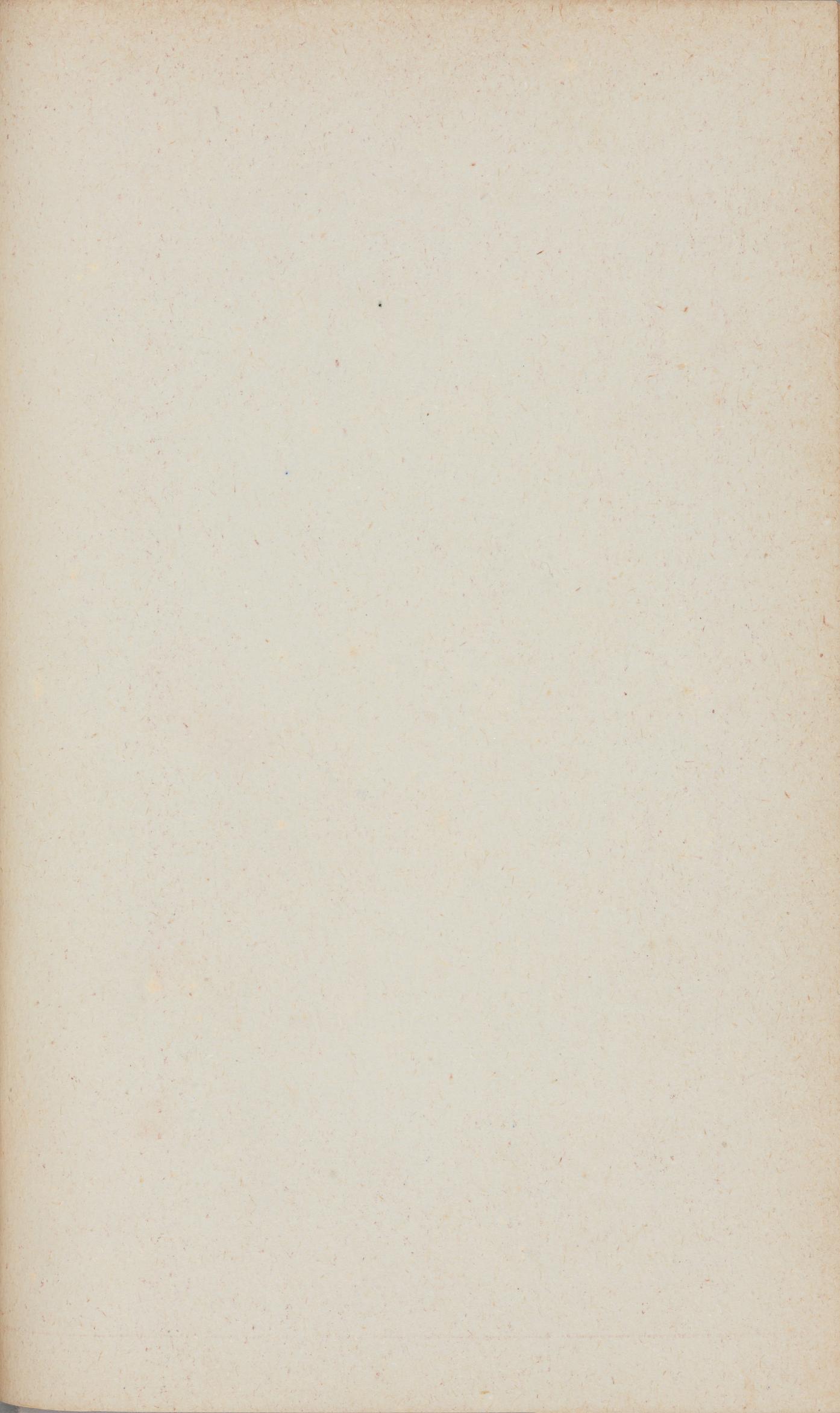


明治

40-6



五廿年



## みづゑ第二十五要目

前號要目

清境(水彩畫原色版).....	丸山晚霞
清境に就て.....	丸山晚霞
色彩應用論〔六〕.....	榕村主人
湖上の雨(水彩畫石版).....	大下藤次郎
美術館水彩畫所感 .....	石川欽一郎
僕の旅行.....	B M 生
ぬきがき.....	水聲無思
月次會の記.....	はん
繪葉書競技會記事.....寄書.....會告.....問答.....讀者の領分其	△口繪清境.....原色寫真製版所
他數項、寫眞版數葉	△湖上の雨.....山田石版所
	△寫眞綱目版.....秀英舎第一工場

○アルハンブラ(水彩畫原色版) ··· 吉田藤尾○美術館の水彩畫 ··· 大下藤次郎○トーマス、ギルチ  
ン(下) ··· 青人○そのをりく〔三〕 ··· 三宅克己  
○奈良の一夜 ··· 四丁○満月(水彩畫石版) ··· 大下藤次郎○弱虫 ··· S M 生○片山潛氏の繪畫鑑賞  
談 ··· 汀鷗○叢話 ··· KSKO○寄書其他數項

船運更・實兵丸賣棄

餘葉書籤共會題事……實書……會云……問善之……鄉音の船食其

民大會の馬……實書……會云……問善之……鄉音の船食其

爲意欲事……實書……會云……問善之……鄉音の船食其

對の意合……實書……會云……問善之……鄉音の船食其

美濃前木漆畫御想……實書……會云……問善之……鄉音の船食其

勝土の舡(水漆畫正則)……實書……會云……問善之……鄉音の船食其

舟塗船體(六)……實書……會云……問善之……鄉音の船食其

吉田船體(六)……實書……會云……問善之……鄉音の船食其

船體(水漆畫正則)……實書……會云……問善之……鄉音の船食其

10  
2



外見其の富貴也

外見其の富貴也

餘は之を以て是を嘗て會合す。聞者一齊共に謂吾等

余は之を以て是を嘗て會合す。

是を以て

前記





み

づ

ゑ

第二十五

明治四十年六月三日發行

清境に就て

丸山 晚霞

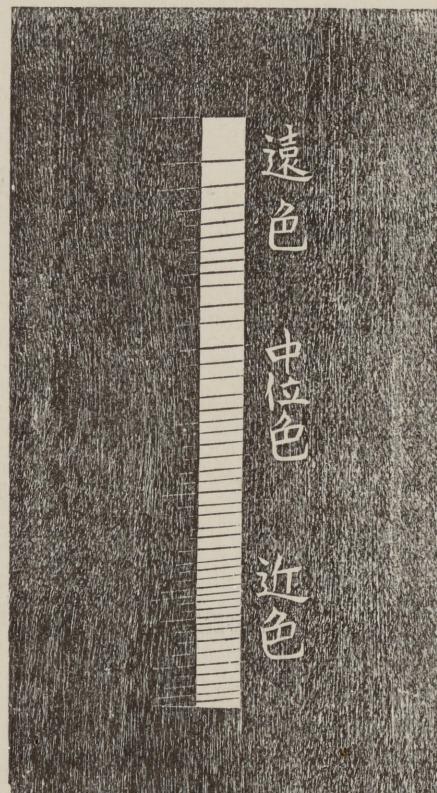
口繪は、一昨年の夏描た繪で、昨春太平洋畫會に出陳したものである。場所は信州淺間山脈湯の丸山の裾野にて、吾妻河の水源である。この附近に鹿澤溫泉といふのがある、深山のことであるから氣候涼しく、盛夏の好避暑地として又夏の綠の研究にも最も適して居る。空氣は澄明にして水蒸氣多く、湯の丸山巔は絶えず白雲に掩はれ、丈なす夏草は滴る如き鮮綠を呈して、これが山下しの風に波立つて、低き雲はその上に影を落して、或は明或は暗となりて、變化極り無きの直感は寫生の筆を下す事が出來ない程の活動である、そして曇ると見れば忽ち雨が降り出し、晴天のときは趣が乏しい、この繪は今にも雨が降り出さんといふ感じを描たので、頗る苦心の作であるが、自分の感じた十分の一も現はすことが出來なかつた。清境と感じたのは、幾日寫生に出かけても人に會することなく、展げたる裾野の澤にまで草茂り、隠流の響きはこれぞ源泉にて、雲の中には杜鵑啼き、草の裡には鶴啼きて、これ等の天樂は這般の景に適合して、清境の感を惹起したのである。

繪畫は自然活動の直感を描き現はすものであるが、感を現はすといふのは第二のこととて、美感の要素たる形と色を先づ第一に充分研究しなくてはならぬ、殊に風景畫にありては、夏の綠程無圖かしいものは無い。在來の日本畫は、寫意といふ事のみに重きを置き、畫の尤も貴ぶ可き形や色を輕視したため、色彩の智識は頗る幼稚である。夏の自然界は綠であるといふ事を觀念し、その綠は青と黃の混和したるもののもつて、自

然を寫生しながら實際の色を着けないで、自分の頭腦で定めた色を以て描て居るものが多い、故に初學者の寫生したものを見ると、遠近明暗等が同じ綠の濃淡のみで出來て居る、これでは寫生で無く想像畫である、寫生の貴いのは自然そのまゝの色を現すのにありて、自然が示して居る綠には等しく綠といふてもその種類は頗る多いので、人々の想像以外の變化色があるから、これを現はさなくてはならぬ、例へば紅味を帶びしもの、黒味を含みしもの、茶勝ちのもの、黃勝ちのものがある、これを充分に觀察し、パレツトの上に各種の色を混和して自然の發色に似たるものを作り、それを着彩したものが寫生の色である。自然界の綠は、單に黃と青の混和といふ念を去らなくてはならぬ。冬の常盤樹と初夏の新綠及び盛夏の色等を注意し、又草木の種類と、晴曇、朝夕、雨中、雨後等に現はるゝものと、山中の都會の草木とに注意を拂へば、種々なる變化の綠を自ら承認する事が出来る。斯くも變化極り無き種々の綠を描き現はす事の至難なる上に、綠は變化しやすき色である、これは黃の褪色するためである、故に黃味を強くするのがよい、如何に黃味を強くするとも、全體に於ける色の調和を得れば少しも差支ひないのである。

山を描き又は野を描くにも、透視畫法を誤つてはならぬ、透視畫法は、人工物の規則正しきものにありては正格に説明する事が出来るが、山野の如き自然の曲線形にありては説明する事が難いのである、これを規則正しく説明するには、曲線形を直線形となして描くのである、先づ人工物に於てその理を究め、自然の曲線形に應用して描くのである、そして直線は誰の目にも正不正を見出す事が出来るが、曲線にありては、修養せざるものゝ目に、その曲りたる實線を認める事が出来ない。輪廊を描くに曲線を用ひては、實形は描けないのである、故に輪廊に直線を以てせよとはこれがためである。口繪の圖の如きは、凡て曲線にて出來て居るから、右の理を以て描かなくてはならぬ。形の透視畫法と色の透視畫法があつて、前者より後者が至難で、これは前者の如く系統的に説明する事は出來ない、要は光線と空氣に依て現はるゝ色であるから、研究

の結果自ら悟るのである。初學者にありては遠近の色を認識する事が出來ないため、形のみは遠近が現はれて、色に於ては更に遠近が描てないから、畫は平面に見えて圓味と奥ゆきが無い、これは色の遠近を究めないからである。左に掲ぐる圖は遠近の色を認識する器であるから、初學者は試むるのがよい。



右の器はボール紙を横二寸縦五寸程に切り、圖の如く縦に巾三分長さ三寸程の穴をうがち、全面を黒く塗りたる者である、着色を爲す其時器の穴を透して實景を見ると、下の部は近色にて、漸次上部に向つて遠くなる色を明かに認識する事が出来るのである。假にこの器を色認器といふ名稱を附して置く。全面黒色の細き穴より透して見ると、他に視力を奪はるゝ明が無いため、誰の眼にも遠近色が見らるゝのである。運筆も遠近といふ觀念を以て下さなくてはならぬ、遠近同一の運筆をなすと、色や形に遠近はありても、筆痕の爲めに遠近が破らるゝ事がある、凡ての場合に於て、前景は強き筆力を現はし、漸々遠くなるに従つて筆力を弱めるのである。時によりては中景より先の方は清淨なる水にて洗ひ、更に淡き色を幾度か着けると、奥深い遠き色を現はす事が出来る。風景畫の至難とする處は、前景より寧ろ遠景にあるのであるが、兎角に前

景のみに全力を注ぎて、中景より遠景は單に淡き色を一二回位塗て置くものが多い、がこの弊は捨てなくてはならぬ、中景より遠景は一見淡色に感ずるも、仔細に觀察すると、その淡色には深味があつて、明かに認識さるゝ近景の色より複雑にして、これを描き現はすは容易の事でない、熟練せし人は調子の上にて二三回位塗りて、その深い趣きを現はす事が出来るが、初學者にありては感想を現はすといふ事は第二として、どこまでも自然に師事して、自然の示して居る形と色とに就て研究するのがよい、究むれば究むる程神祕的なる自然の美しい色彩も認識する事が出来るのである。

口繪の圖は尤も活動せる趣きを現はしたものであるが、これは初學者には容易に寫生する事が出来ない、前にも述べし如く、畫の極致は活動せる自然の直感を現はしたものであるから、これを現はす上に於ては自然に親まなくてはならぬ、畢竟自然の懷に這入らなくてはならない、常に寫生帖を携帶して、活動せる自然の感じを書き記して記憶するのである。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

## 色彩應用論〔六〕

樺村主人

### 空氣の遠近

空氣の遠近に於ける色彩と、線の遠近に於ける形體とは同一の關係をもつて居るものである。線の遠近は輪廊や組立に限られて居るが、空氣の遠近の研究は畫面全體に涉って居るもので、大氣の種々な結果はいふまでもなく、陰陽もしくは色彩の對照等に最重要なるものである。此故に空氣が風景に及ぼす關係を仔細に研究して置く必要があるのである、純粹な大氣は全く無色透明であつて、遠方の物も明に見ゆるもので、山國に行くとこの現象がよく見られる。以太利あたりの空氣は水蒸氣が全く含まれて居ないので、遠方にある細微な物でも明に見えるが、北亞米利加の如きは空氣は非常に蒸發氣を含んで居るから帶熱の鼠色を呈して、遠方の物は全く色が變つて居る。

山や遠景の調子の變化する原因は澤山ある。自然の一部分は或度までは一様の色であるが、風景全體を通ずると光線の關係に依て一様でなくなる。此故に岩石、土地、植物等の凹所等の關係から陰陽色彩等が不同となるのでこれを遠方から見ると、此種々な色が綜錯して一種の印象が出来るのである。

空氣を描くには、その濃淡の度に依て、また色に依て、極めて薄い幕が幾枚も掛つて居るといふ心持をするので。だんくに遠方に到るに隨て帶藍鼠色の單調な色となるのである。畫面の前景の色はその眞の力のあるものとしてあつて、光部は最も明で陰所も最も暗い。百ヤードの距離になると、幕一枚掛つて居るとする、一哩で二枚、四哩で三枚、極遠方となつて四枚掛つて居るとなるのである。此四枚の幕といふ心持は室内に於ても應用が出来るのである。左方に遠山があつて、一方には前景の小家があるとして、其輪廓は同一である、右と左と異なるといふのみであるが、空氣の遠近に依て、一つは見る人の眼前にあるが如く、他は數哩を隔てゝ居るやうに見へるのである。かゝる試験を郊外で重れると、綠や赤を常に眼前に見るが如くに描い

ては空氣を現はすことが出来ないといふ事に思當るやうになる。

畫面に空氣の様を現はすには、天空や遠方を塗ると同じ方法にして、帶藍の鼠色で上方左の方から塗り下して、徐々にマダースの色を加へて行く、前景の邊に到るとエロー・オーカーかバーントシーナ強ちの塗料を塗る。かゝる方法で二度三度と繰返して塗るのである。素より暖みと空氣の度に依て多少の手加減はあるべき筈である。人に依るとこのブリューや鼠強ちの中和色を前景まで塗るものがあるが、これは餘り望ましい事でない。其故はといふと、明確なコントラスト<sup>コントラスト</sup>や純粹の色彩を前景に得ることが出来なくなるからである。それのみならず、折角の天空や遠方の空氣のエフェクトをも打壊はす事となる。

空氣の遠近を畫面に附するには、前景の樹木または岩石等とよく照合はして、その遠近の調子を見て描かればならぬ、風雨に曝された家根の寂の色や岩石の蘚苔の色等も、その遠近の度に依て空氣を含ませて描かればならない。もし最初の塗でも、後に描いても、空氣の遠近が可く表はすことが出来ないときには水を塗つて暗い部分を拭去るか、または水の含んだ筆で適度に擦るかして、畫面を模糊とさせる、また少量のチヤイニースホアイトを非常な注意を以て薄く塗ると、空氣と遠方を表はすことが出来る。若し暖みを欲しいとなれば、其度に應じてライトレツド、エロー・オーカー、カドミニーム等を加味すれば可い。またクリムゾンレーキとコバルトで鼠を作つて薄く塗つて乾いた筆で擦つても表はすことが出来る。この方法で日光の赤味やオレンヂ色の調子を帶びた暖かみを遠方の部分に表はすことが出来る。同じ方法で烟等も好く表はすことか出来るのである。(空氣の部完)

\*

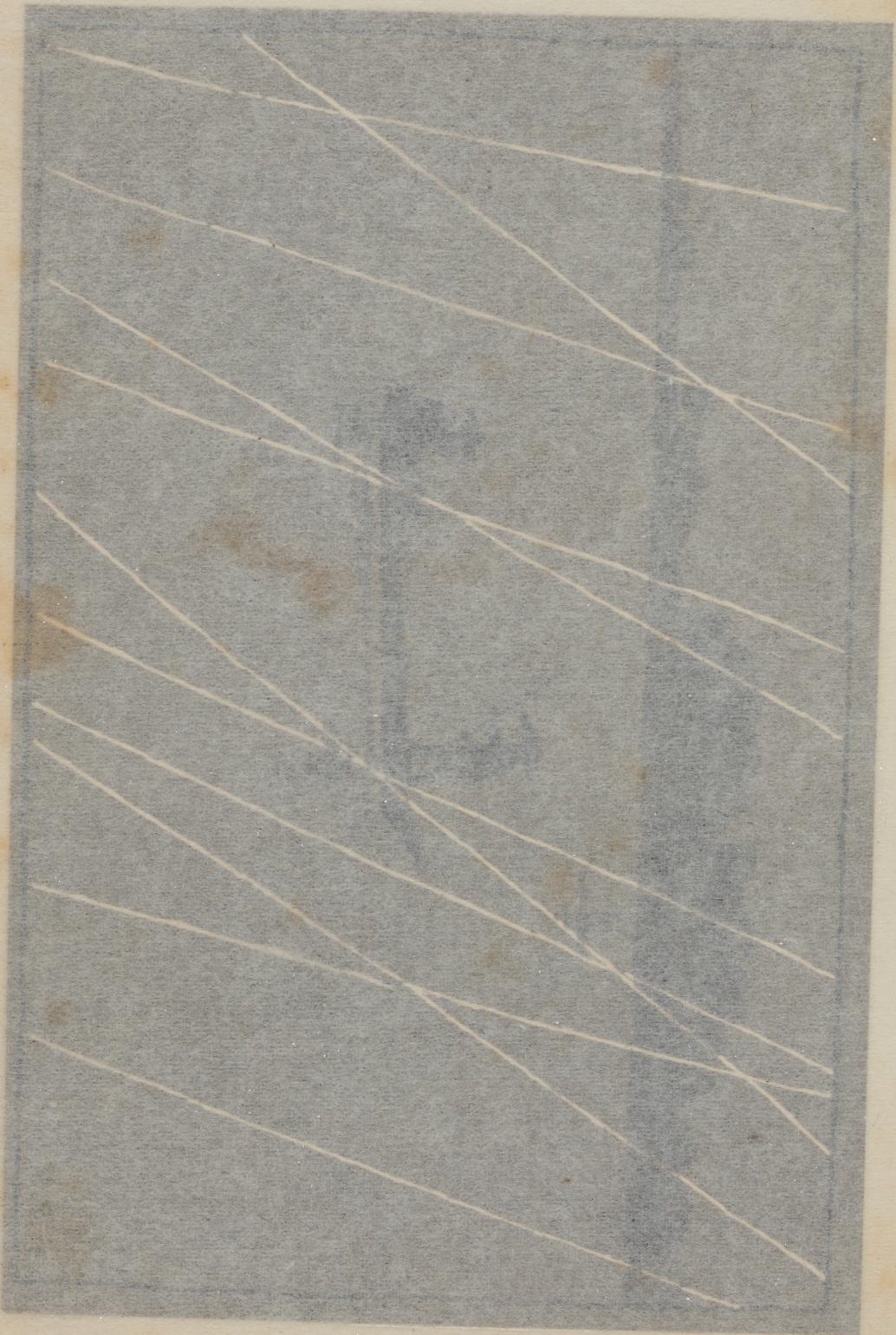
\*

\*

\*

\*

\*



ては空氣を現はすことが出来ないといふ事に思當るやうになる。

畫面に空氣の様を現はすには、天空や遠方を塗ると同じ方法にして、帶藍の鼠色で上方左の方から塗り下して、徐々にマダースの色を加へて行く、前景の邊に到るとエロー・オーラーかバーントシーナ強ちの塗料を塗る。かゝる方法で二度三度と繰返して塗るのである。素より暖みと空氣の度に依て多少の手加減はあるべき筈である。人に依るとこのブリュードコントラストや鼠強ちの中和色を前景まで塗るものがあるが、これは餘り望ましい事でない。其故はといふと、明確な對照や純粹の色彩を前景に得ることが出来なくなるからである。それのみならず、折角の天空や遠方の空氣のエフェクトをも打撃はす事となる。

空氣の遠近を畫面に附するには、前景の樹木または岩石等とよく照合はして、その遠近の調子を見て描かねばならぬ。風雨に曝された家根の寂の色や岩石の蘚苔の色等も、その遠近の度に依て空氣を含ませて描かねばならない。もし最初の塗ても、後に描いても、空氣の遠近が可く表はすことが出来ないときには水を塗つて暗い部分を拭去るか、または水の含んだ筆で適度に擦るかして、畫面を模糊とさせ、また少量のチヤニニヨスホアイトを非常な注意を以て薄く塗ると、空氣と遠方を表はすことが出来る。若し暖みを欲しいとなれば、其度に應じてライトレツド、エロード、オーラー、カドミニーム等を加味すれば可い。またクリムゾンレードとコバルトで鼠を作つて薄く塗つて乾いた筆で擦つても表はすことが出来る。この方法で日光の赤味やオレンヂ色の調子を帶びた暖みを遠方の部分に表はすことが出来る。

同じ方法で烟等もよく表はすことか出来るのである。(空氣の部完)

\*

\*

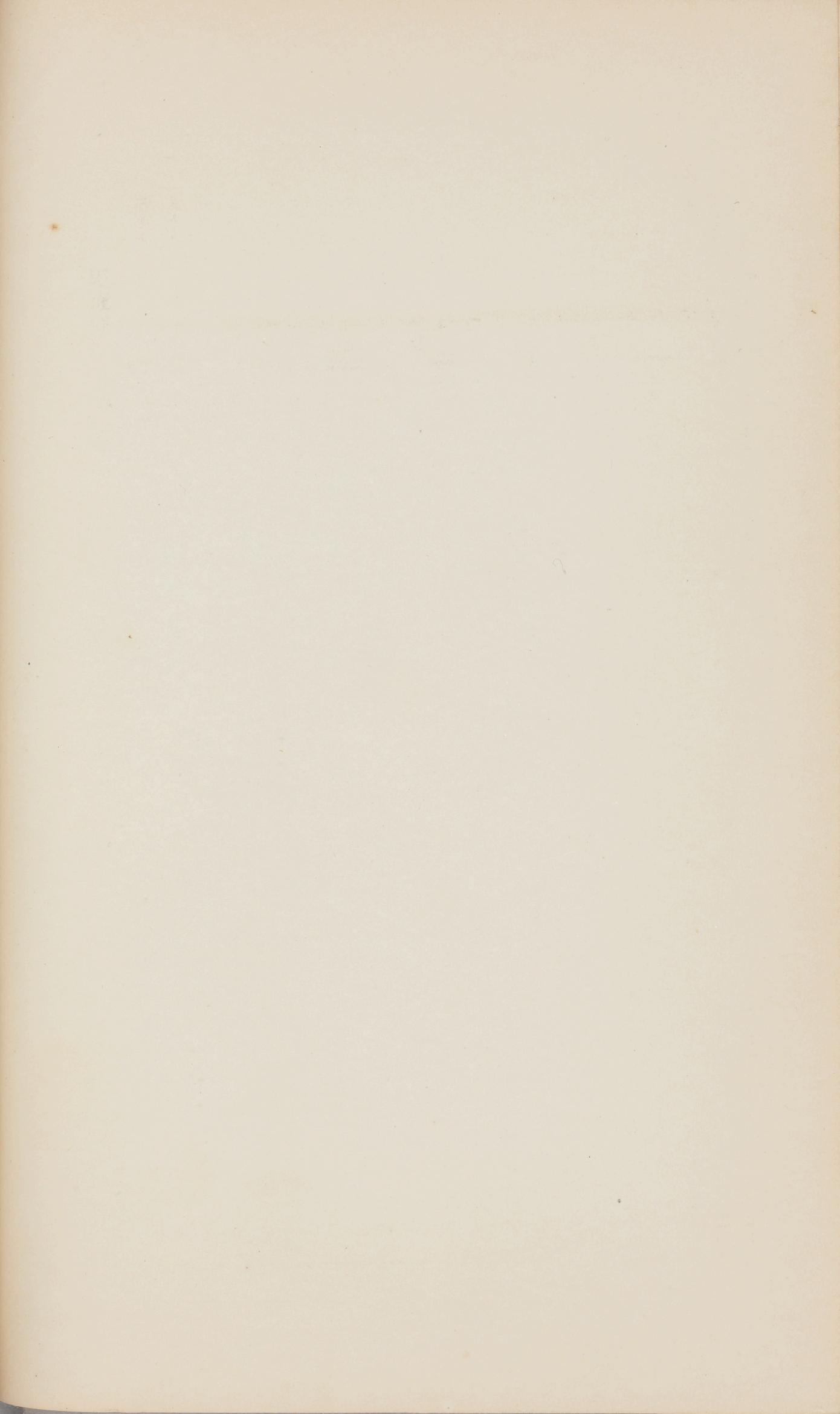
\*

\*

\*

\*





## 美術館水彩畫所感

石川欽一郎

博覽會の美術館に入り水彩畫を見て、第一に感ずることは元來其趣味が日本的なることなり、油畫の方は未だ我物と爲すには前途遼遠なるが如きも水彩畫の方は餘程近づき來つたかの如く思はるゝことなり、日本畫にて企てんとして失敗しつゝある點を水彩畫にては割合に能く顯はしつゝあることなり、又た水彩畫ならば油畫の如く日本風の座敷の調和を害せずして裝飾にならざることなり、水彩畫は油畫よりも一般の日本人に分りがよく其氣性に適したるが如く思はるゝことなり、最とも是等は獨り美術館の水彩畫には限らぬことなるが、美術館の水彩畫に就て見るに、其流派が種々雜多にして圓き畫法のものあり剛きあり濶麗たるものあり明白なるあり、何れも作者の意の向ふ所に従ひ各自の領分を充分に現はせるは、觀者の眼に變化を與へて興味を深からしむるのみならず、漸く作者の主張をも窺知することを得て後來の發展上誠に賀すべきことなり、又其畫題に於ても種々にして且つ自から分擔的の傾向を生じつゝあるは西洋美術國の有様に徵し追々斯術の隆盛に向はんとするの趨勢をも察せられて力強きことゝ云ふべし、同じ景色畫の中にも、山水畫家は専ら山水に從事し田園は専ら田園に或は靜物は専ら靜物に其研究を重ねんとするは益々奧儀を啓得する上に於て最も希はしく又必要ならずとせんや、此に於てか彌々益々其本領を發揮して特殊の妙味を自家作品に現はし來らんとす、水彩畫

の前途萬歳なるかな、最とも茲に少々物足りない事ありそば外でもなし人物畫の振はざることなり、成程水彩畫にて人物は油畫の如く修正すること出來ざる不利益あり從つて六かしきものなり、併しながら人物に於て骨格とか肉色とかの難處がある如く景色にても色の遠近空氣の關係を現はす等には、負げず劣らざるの困難あれば此處まづ五分々々と云つての差支へはなかるべし、已に風景畫にて一家を爲せる作者になどか人物をも作り得ざるの理あらんや、然るに別に理屈ありと思ふは外でもなし、天氣の奸く時候の長閑なる日には薄暗い畫室の中にモデルと相對せんよりも三脚を携へて氣清き郊外に飛出し度思ふこと之れなり、否獨り天氣の好き時に限らず、雨が降れば又降つたて面白き景色あり其泥濘に寫れる色、車の輒ドーモ何んとも云へぬなり、風が吹けば吹いたて面白し黃塵濛々たる有様は誠に好き畫題ならずや、大嵐は又た大嵐で面白し、去つて岩頭では無かつた海邊に立つて白浪怒濤黒雲覆雨を觀せば彌々我術の遠く及ばざるを悟ると共に又深き有益なる教訓を受くるに非らずや、こう云ふような譯で、何時になつても人物を畫く時機は無かるべし、併し無かるべしては不可なり、どう有つても水彩人物を弘めざる可からず研究せざるべからず、今後奮つて水彩畫人物畫の出品、倍々多くならんこと希望に堪へざるなり、之れは唯希望なれば所謂慾なり、正味の所を云へば、美術館水彩畫は現在の儘にて既に申し分なし結構艱有と存ずるなり、人物畫が欲しいの何んのと云ふは此美術館に關係せるにはなく別の要求な

り、別の要求では有るが之れは一般の要求なれば、一つ水彩畫家は大に種を締める時到來と云ふべし、終りにもう一つ述べきことあり、最早水彩畫の盛運今日の如く目出度きことなるに、之れが専門の團體の設け非らざるは恰も花見に來つて酒なきの感なくくば非らず、願くは帝國水彩畫協會とか水彩畫研究會とか云つたようなものを早々計畫組織し此道の研精に任せば如何、將に鬼に金棒閣魔に釘拔豆腐屋に喇叭なるべし、何卒早速同志諸君の御決行を切に希望する次第なり、以上東西々々、

## 僕の旅行

僕が旅行する時は先づ地圖を開いて川に沿ふた地を選ぶ、溪流に沿ふた處の風景は大概美である。さて目的地に達した時には其土地の人々の話を多く聞くのである、土人の云ふ景色は殆ど奇景であるが、其奇景のうちにも自分の理想に合つたやうな處も察しられるのである。

旅行の用意は軽装を尙ぶるは勿論である、履物は草鞋が一番よい、僕は綠の研究のため多く夏に旅行をするが一番困るのは毒虫である、曾て松明を翳して行つたともあつた、飛驒山中のある處では檜の皮を燻べて腰に下げてゐた、虻はうるさいものである、眼の前にクル／＼廻る蚋には困る、其時は目を細くすると一時何處へか行く。西洋婦人のヴエールのやうなものを用ひたらよからう。寫生中に飛んで来る虻は豫防の方法がない、

蟻された時にはハブ草をつけるとよい、ハブ草はエキスにして置くと携帶に便利で旅行中など入用なものである。其製法は、ハブ草の實を結ばぬうち葉と共に湯煮して、漉して其汁を湯煎にすると濃液となる、蝮蛇に咬まれた時もこの液をつけるとよい、蝮蛇の時は切り取るのが一番よいが。前後を固く縛つて毒血を出さぬと後に大害がある。蝮蛇の居る處には必ず萩があるから、萩のある場處で注意すればよいとは土人の言である。昔から紺がよいとの話であるが、餘リアテにはならぬ。

僕は溪流を見ると其源泉を探りたくなる、啻に探りたい許りでなく必ず探ることになつてゐる、新潟へ往つて信濃川を見ると、其水黃濁決してよい感じが起らぬが、其源流たる千曲川は天下の美を極めてゐる。

夏の旅行でも下着は毛織物がよい、軽い毛布が一つあれば山中に野宿するとも出来る、又山中深林の中などで寫生でもする時は、濕氣のため病氣を起すとがあるから、出来るなら傍らで焚火をするとよい。(丸山晚霞氏談話の一節)

紺は蝮蛇を妨ぐとが出来るそゝであるが、其紺は必ず新しく匂ひのあるものでなくてはならぬ。(編者)

\*

\*

\*

\*

## ぬきがき

洋畫家への忠告

(故、林忠正氏)

水聲無思

いふことである、美術的觀念は人間に着いて生れたものである、其觀念か外物の醜美と人事の感情に刺激せられて外に發するのである、言語に發して文字に綴りたるもの

この忠告は世間残らずに言ひたひ忠告である、それはドウいふことであるかといふに、總て物は發達するに時日を要するものである、美術の發達もその通りで、種子を蒔き花が咲き實を結ぶといふ順序に運ばねばならぬ、夫故年數を経て練磨しなければイクラ急いでも好い結果は見えるものではない、而して其間も熱心でなければならぬ。

今日吾國の美術家は、美術に必要な約束を悉く極めてゐない、世間は一體に美術といふとを知らない、唯ワイヤー言つてゐるだけで、美術の未だ發達せざる前の者を元として、何にでも應用して美術々々といふてゐるのである、ソレは美術が西洋に發達した種々の約束箇條の一部分に止まるものである、ソコデ茲に一應入念すべきは、美術と美術的思想とを混じてはならぬと



水彩画研究会例展次郎筆 松の約束

いふことである、美術的觀念は人間に着いて生れたものである、其觀念か外物の醜美と人事の感情に刺激せられて外に發するものは文章である、言語に發して文字に綴りたるもののが俗に云ふ美術である、其形體は眼を借りて見るものである、眼が潰れてはモー見るとが出來ぬが、こゝの區切りの附いた一部分を以て美術といふてゐるのである、其他の美術思想から成立つて現はれたものは、美術即ちボーザールとは云はれない、物の形を借りて、或は繪にするなり彫刻にするなり、ドンナ約束があるかと云ふに、マー第一の必要は其形を有の儘に間違なく寫すといふことである、これは誰れも知つてゐるとてはあるが、サテ一つの品物、又は人の顔であらうが、花であらうが、鳥であらうが、ソレを見た其儘に寫すは何でもない様であるが、ソーハヤカぬ、從來の寫生は唯見たものに稍似たものが出來たといふに過ぎぬ、元來寫生は美術の一部分で、特に初步の約束であるから、餘り寫生々々と大聲で申度はないが、ソレさへ日本では進歩してゐないのである、ソレデ物の形を寫

すといふと、單に其形丈けに止まるかと云ふに、其次にモー  
一息ムヅカシイ約束があるソレは佛蘭西語のマチエール、即ち  
物質といふものを寫すのである、全じ形を寫して見ても、其物  
の物質は木であるか石であるか、或は織物であるか皮肉である  
かといふとを寫す必要がある、全じ木のうちでも、これは軟い  
木である堅い木である、杉である櫻であるとか、白いものを描  
いても、コノ物質は雪であるか綿であるか、砂糖か鹽か、其區  
別を描き分けるといふとでなければならぬ。

織物でも、今日西洋の寫生家が巧みに寫したものは、實に真に  
迫つて、織物屋がこれを見て其品物の値打をいふとが出来る、  
コレなれば一メートル何程でなければ織れぬなどいふとの出來  
る位ひである、ソレが本當の寫生である。

扱右の二箇條を熟練したら、美術といふものが出來るかといふ  
に、中々ソーア旨くはゆかぬ、今申した二ヶ條の外に、位置を寫  
すといふとがある、此約束のうちに遠近法も入つてゐる、遠近  
法即ちペルスペクチーブは、遠い近いの極端のみを云ふのでは  
ない、必ず手前を廣くして向ふを狭くするといふ許りの話では  
ない、一物一點のうちにも必ず遠近法がある、況して種々なる  
ものを排列するに於ては各々の位置が最も大切である、爰に一  
個のコツプがある、このコツプを横から見ると、コツプと空氣  
との堺目が見える、ソレのみを示したのが繪の輪廓である、然  
るに實物では圓くなつて前へも後ろへも膨れて出張つてゐる、  
又其中が空になつてゐる、これを肉眼で見たやうに描くのが即

ちペルスペクチーブの法則に従はなければならぬ、然るに品が  
變り位置が違ひ、色々の物を一目に供するには、數限りなき複  
雜な約束が必要になつて來る、其約束は其場處其位置に残らず  
入つて來る、地面の高低、又は物の厚さ深さ等ソレダケでもム  
ヅカシイが、ソコで又美術といふとを見せるといふ時には、向  
ふにある庭の樹木であるとか、岩であるとか、石であるとか、  
これは水、これは山、或は何々と人を感動したる美を悉く示さ  
ねばならぬ。

ソコデ、形を描くのと物質を寫すのと、物の位置遠近を誤まら  
ざると研究が稍や積んでドーカコーカ出来るやうになつて、  
漸く美術の門に入つて、後にコレカラ稽古すると云ふ下拵へが  
出来かゝる位ひのものである。

其次にモー一層ムヅカシイ約束が出來て來る、ソレは何かとい  
ふに、斯う云ふ總ての品物は皆その色を持つてゐないものはな  
い、コノ色が無かつたならば無論眼には觸れない、ソコで理學  
的の色論を別にし、假りに物品に色があるものと定め見ると、  
品物その物の色も光線の當り工合で一々違つて見える故、物品  
の色と光線との二つを研究するとが必要になつて來る、假りに  
この椅子の木の色は栗色をしてゐるが、窓の硝子は透明して白  
に屬してゐる、ソコでこの色を描かなければならないが、殊に  
物質を描くには色が必要である、ソレで光線の當り加減を兼ね  
て寫すとすると中々又ムヅカシクなつて來る。

昔しば日本や支那、支那許りでない、西洋でも赤いものは赤く

描いてソレでよいものと思つてゐたのである、唯西洋では聊か歩を進め、遠近法によつて其影を寫すやうになつて、同じ青い色でも濃淡をつけて見るだけにしたのみである、詰り日本の繪では、赤なら赤を平にナスクつて置くだけで、ソレから西洋の繪はそれへ蔭をつけて浮くやうにしてある。

更にムヅカシイ約束、ソレは物品その物自らが、色のある其上に持つて來る光線の作用である、其

光線が眼に反射して來て一種の感じを起し、其光線の當り工合で同じ色のものも種々に見えて來るから、其違つた處を見せて描かねばならぬ、ソレがなければ完全なものでない、ソレを描いて初めて本當のものを見たやうな感動を起させる、ソレがなければ感じを傳へるとが出來ぬ、ソレがなければ繪に活氣を持たすことが出來ぬ、故にソレが出來て初めて繪

畫の實體といふものが完全するものであります。今日迄生きてゐるドガ氏クロード・モネー氏等右等の約束を兼て自在に描き出したる大家である、其畫風を指してアンブレッショニスムといふ、これ等の大家の繪は實によく出來てゐるが、其門下人の繪は一向好くは出來てゐない、何故好く出來ぬかといふに、唯上皮を眞似てゐて研究してゐないからである、イクラ

骨折でやつても土臺がないから詮方がない、其物質のみを現して光線の作用を現はしてゐない、クロードモネー氏の繪に限り非凡である、近いて見てはテンデ何が何だか分らぬ、サレド或る光線の距離に従つて見れば、實にドーモ今日のヤカマシイ約束が残らず備はつてゐる、下手な人達の描いたのは繪具がメチャクチャに固まつてゐる許りである。

繪畫の外形のみでもその位ひのものであるから、兎に角形、色、位置のこの三つの約束を段々研究して往かなければならぬが、美術の話は精しくすればする程盡きないものであるが、以上の研究が不充分では、一人前の技術を持つくるものと云へない。

美術家は中々他の學問を爲す人とは違つて、終世逆境に立つものである、夫故誤つて美術家に落ちたものは、豫て其覺悟が肝要である、丁度耶蘇宗未だ弘まらざる以前に困難したエライ坊さんにても成つた心持で、自分は一生この事に心を入れてゐても、生てゐるうちにトテモ人には知られぬといふ位の覺悟でなくてはならぬ、ソシテ今云ふ、三つの約束を研究する一方でも一生を終はる覺悟でなくては、本當に日本の基礎となるべき美術は出來ぬであらうと思ふ。



花 章 千 代 子 第 二 回 第 一 章

其位ムヅカシイ困難のものであるのに、三年か五年の間に於てドーも去年より一向進歩が見えないなど云ふは、世間の人位無理なものはない、ソレで諸君は氣を長くお持ちなさいと云ふと忠告する、又勉強する上に於ては、心中は一日も怠ることはなく熱心の上に熱心を加えて居る譯であるから、世間の人もモツト氣長に待つて貰はなければならぬ。

ソコデ現在に於て、西洋風の繪畫が世間に立派に現はれてゐるかドーであるかといふに、今云ふ第一の約束デツサンといふものが充分に出來てゐない、中々立派な名前の人、即ち大家と云はるゝ人の畫でも、稍やもするとデツサンの足りないのがあるのは誠に惜しいものである、又其後を繼いだものになると、デツサンが分らないやうな氣持がするソレデもつて繪を描いた日にはコレ位間違つたとはない、現に黒田君が巴里に往て教はつた時に、教師がドンナ工合に教へたかと云ふに、何時でもデツサン許りで責めてゐた、自分は繪の具を持つて見たいと思つたが、教師は悉く退けて、ソレよりもデツサンをやれ、アレよりもデツサンをやれといふた、其位デツサンに重きを置いてゐるのであります、ソコへ持つて往て、デツサンは未だ出來ず、ソレカラ光線の作用は未だ分らぬといふやうでは仕方がない、コレは充分研究練磨すべきものである。

自然は我等の師である、自然の與ふる美に就てその美の依て起る源を研究すると、自然是吾人に最も興味ある祕め事とも明らかに教ゆるのである。繪畫の興味は言葉を以て傳へるとが出来して、唯今申したる處の約束を缺くべからざるものとして守つて往けば、遅かれ早から出來て来る、又ソーリしてゆくのが技術

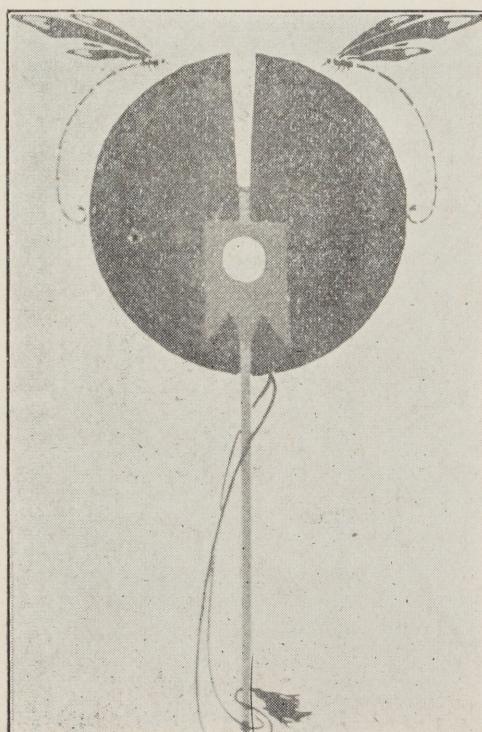
者の本分であらうと思ふ云々(下略)

以上は明治美術會紀念大會のせつ演説せられたものにして、三宅克己氏の『そのをり』(第三(みづゑ二十四))にも言はれし如く、繪を學ぶ人々の服膺すべき金言である。

\*

\*

\*



等一回二十三會技競キガハユ

吉木錠 [月四]

△ △ △

文壇の大家某氏曰く「博覽會で繪を見て來ました、日本畫にも西洋畫にも何れも物足らぬ處はある、不足はあるが、日本畫の方は最早老成してゐて、不完全なのであるから、前途の望はない、西洋畫の方はまだ年が若く、詰り其れが爲めに不充分といふのであつて、將來が遠いから大に希望がある」と。

父曰く「油繪は未だ何となく重い處があつて、日本に調和しない、水彩畫はよく日本の自然が描き現はせてあるし、日本の建築にも適する。

日本畫に飽き足らず、油繪ではシッコイといふ、現時の要求を満たすものは水彩畫であらう、將來繪畫界に重きをなすものも同じく水彩畫であらう」と。



高橋子孫筆

黒田清輝氏曰く「繪は他の學問と違ひセオレヲカルのものでないから、其教授法にも如何に畫くべきかとの講釋はない、只先生の研究所へ毎日出掛け、獨習したり他の人の畫くのを見学して自分で畫くのである、すると先生が日に一度宛學生の畫を批評される、批評といつても『君の繪は餘り堅た過る』とか『柔か過る』といはれるのみで、如何にすれば堅くなるか柔かになるやを教へるのでない、夫故學生自身が種々に工風もし研究して畫くので、斯くして畫く間に自然と自得し上達するのである、云はゞ先生はたゞ繪の方角をつけて呉れるのである、何故先生がこのやうにするかといふに、餘り先生が干渉して手を執つて教ゆるやうなとでは、却て學生自身の伎倆が發達しない、又斯く々に畫かれねばならぬと教へては、其畫が先生と同模型となり、本人の特色を發揮する妨となり大家となることが出來ないからである」

又曰く「野心と慾氣は美術研究の禁物である、それを悟つて、此に始めて畫が俗氣を離れて美術的のものとなるのである（中學世界）

\* \* \* \* \*

## 水彩畫研究所四月月次會の記

殘人の花は一片毎に春を送り盡して、あはれ帝京の春今將に暮なんとす、野に立つて行く春の曲を歌ふものは誰ぞ、傷ひ哉岸に佇めば、江水春を流して水に音なく、仰て天空を望めば、白雲岫頭に湧いて西風坐ろに寒し、あゝ我昨夜落花を夢み、三春の行樂未だ盡ざるに満目荒寞の景、覺めて此痛恨の思を如何せん、

今朝南風高く吹て、雲の帷は忽にして散しぬ、曙光融々青霞一抹已に我心新なり、東郊西疇たゞ菜花黃に青麥秀て、村々落々迺かに筑波の頂を望む時、突如脚下より翔けり立ちて、みるがうちに青空高く飛び上り薄絹の如き霞に漂ひつゝ歌ふものは雲雀ならずや、自然の美觀、不可言の妙趣、美神の懷ろに抱かるるものは幸いなるかな、

此日(四月二十八日)墨堤百花園に同好の月次會は開かれたり、舟よりするもの、車よりするもの、先つもの、後ろゝもの、やがて二十幾名と注せられぬ、

人集まる頃天殘なく晴れ渡れり、初夏の風心ふく肌を吹てまづ其快言ふべからず、早く已に三脚を据へてイーゼルに向ふもの、歩々手をとつて園中を逍遙するもの、花を寫すもの、草を賞するもの、語るもの吟するもの、心ゆく此日なるかな、

園は櫻桃花已に散れども、枝葉榛々たる常盤樹のうち楓の新綠滴たるが如く、芳草地を綴つて露に霑ふ、牡丹あり聞くものは

淡紅、開かさるは純白、藤の紫、躑躅の紅、名も知らぬ渡り花、奇葩をひらき異香を放つ、汀の柳、竹の叢、而して狂蝶痴蜂未だ春夢より覺めず、池水の漣燐々として光り輝く、

三々五々の客又春を追ふて来る、衣香道に迷ひ、簪影地に印す、園の聯に曰く春夏秋冬花不斷東西南北客爭來と、實に其名に背かず我等が會又其處を得たりといふべし、

午後一時一堂に會して例會に移る、河合丸山大下の三先生、生徒某々等二十五名、集る所の繪畫百有參十點、僅かに一ヶ月の

作品實に盛會なりといはざるべからず、氣候溫和郊外の春蟄するもの驚き范するもの崩する時、各自彩筆を揮ふ又宜なりといふべし、惜むらくは室せまく悉く之を壁間に掲ぐること能はず、已むなく床上に列ねて批判す、紅黃綠紫花よりも妍也、園中の客亦顧みて過く、羅綾の衣よりも美也、淡淡として瀟洒なるは甲某氏の繪、周到にして濃彩なるは乙某氏の繪、或は緻密細心なるもの、簡素輕妙なるもの、花に草に山に水に一片の自然觀亦丹青の技ならずんは能はざるところ、眞面目なる研究僅かに年餘の此會亦望を屬さるべからず、やかて丸山先生の精密切實なる講評あり、耳を傾くるもの間を發するの作者、苦心一ヶ月の作、於是乎遺憾なかるべし、河合大下の先生亦簡切の評言あり、次て一般の互選となり一等より五等迄の等位を定む、

終つて言問の團子に一座團欒、茶を啜つて坐談咲笑時の移るを知らず、例によつて丸山先生の奇言妙語又一坐の願を解かしむ

るものあり、隔てなき師弟の關係意は言外にありとす、而して興未だ盡きざるに、日已に傾き道愈く遠し、五時に近く散會す、

密かに思ふ、師弟に於ける懇情切意、於之

乎全きといはざるべからず、我等が主義

は高尚なるところにあり、質素なるところ

にあり、誠實なるところにあり、而し

て然も無邪氣なるところに存す、必ずし

も其間一點の邪氣も、一片の猜疑をも含ま

さるなり、世の徒らに虚禮に走り佞媚を

ことゝする輩と同一ならざるなり、苟も

自然を憧憬し美神の懷に抱擁せらるゝも

の、亦如此ならずして可ならんや、或は

亦世の所謂似而非藝術家なるものあり、

詩を作るも繪を賞するも、眞に此等の點

を解せざるもの多々也、華奢傲慢の士は

權勢のものと雖も我等は與せず、今一日

の清會、佳肴を吻まず、婀娜を擁せざる

も、悠々として我事足れり矣、

(はん)



野花 下藤次郎筆

これは小鳥烏水氏の槍ヶ嶽探險記の一  
節なり、旅行家は心得置くべきことと思  
へば茲に借用す。(編者)

夫れ葉も縁なり、蔓も翠なり、其は天地  
皆一青のみ、我おもふに、若し色そのも  
のに重量ありとすれば、青は最も重かる  
べし、濃ければなり。今見わたす限り、  
村家の軒を這ふ絲瓜も青く、垣に巻舒する  
零餘子も青く、たゞその間に離々點々、  
鳶色の藁屋根を露はすのみなれど、それ  
すら闇きほどに縁を浴びて、中に棲まへ  
る人は蠢々として芋蟲の如く青からんと  
す。其の大地はこの億萬斤の重量に堪へ  
て、能くみじろかざるなり、我は天の崇

高を説くものにして、何故に地の壯嚴を讚嘆せざるかを恵し  
む。(山水無盡藏)

日も昏れたれば、急げや急げと、疾驅して下るに、だらだら下  
りの坂道にして、路も埋まるばかりにオンバコ叢生したれば悦

ふこと限りなし、凡そその畔なると堤たるとを問はず、オンバ  
コは必ず人に踏まれたる土ならでは、生えぬものなれば、路に  
迷ひたる人は、オンバコを道知るべの草として、その在るが方  
へ廻れば、人里に出ですといふことな  
し、云々。

## 寫實主義と自然主義

ドイツの『近世美術史』の著者ローゼンベルグといふ人は、繪畫論の序に、寫實派は自然を自然の儘に醜は醜、美は美と寫せども、それが爲めに畫家の圖取、布置、色彩等の特權を棄つることはしないもの、自然派は全く自然に無條件の服従をなして、偶然的でも無形式でも無秩序でも構はず、自然の來るがまゝを寫すものとしてゐる。

蓋し表面の解釋としては要領を得てゐるものであらう、たゞ僕を以て之を見れば今少しく立ち入つた解釋が欲しい。二つながら客觀を客觀のまゝに取り扱つて、主觀の作爲を許さぬといふ點は同じであるが、寫實主義はひとり全體的な布置、結構といふ作爲をば許す、自然主義は之れをも斥けて、全然の無作爲とするといふ。

右の説は或程度迄は眞理である。併し所謂全體の作爲と然らざる作爲との區別は事實に於いて立ち難く、また自然派の作品と稱するものが必ずしも全く一切の作爲を排し得るとは限らぬ場

合が多い、結局はたゞ作爲の痕跡の多少といふ程度問題に歸してしまふ。

それよりも重要な問題は自然派がかくの如く作爲を減じ行かんとする動機は何であるかといふことである。何のために成るべく多く自然に接近せんとするか。其答は夫の英詩人ワーヴィングの自然主義を評した一評家



物故中台本枯星會正氏員

處にあるのではないか。寫實派が古典派に對する不満足も是であつた、今亦自然派が寫實派に對する不満足も是である。

(島村抱月氏、早稻田文學)

繪ハガキ競技會記事  
(第三十二回)

四月(意匠)

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十  
五十一  
五十二  
五十三  
五十四  
五十五  
五十六  
五十七  
五十八  
五十九  
六十  
六十一  
六十二  
六十三  
六十四  
六十五  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十  
七十一  
七十二  
七十三  
七十四  
七十五  
七十六  
七十七  
七十八  
七十九  
八十  
八十一  
八十二  
八十三  
八十四  
八十五  
八十六  
八十七  
八十八  
八十九  
九十  
九十一  
九十二  
九十三  
九十四  
九十五  
九十六  
九十七  
九十八  
九十九  
一百

小齋立大吉赤高宮永後高海森中  
木林藤花峰城川島橋井藤橋老尾  
誠八甚真榮源名正研松曉三泰晴文直之十之一鑑

春木田木椿福桃堤花夕の手に壽連の舍  
路傍の月の手むけ櫻翫艸蓮道蓮花  
吾家のくらりの梅花草花

三赤立外高吉松小大岡森海鈴本後  
條干代城甚花之泰松四晴大之  
藤多木老名榮誠真末一之研曉金  
露藏登二一松郎助帆作郎治助舒子  
(以下累)

四月二十八日開會 出品者二十九名、百二十二枚、選評の結果前記の如し  
意匠の一等は例によつて着色壯重よく題意に適せり、二等は「三月」の筈な  
き振なりしならば二三等に上りたりしに惜むべし。技術は概して佳作少し  
にして、競技の趣旨にも違へり、將來一層眞面目の研究を望む。  
次回は九月頃開催すべし。

## 寄書

問はるゝまゝに

横濱金澤信夫

何んですッて前口上は後にして好いから早く話せッて、イヤ僕だッて話さぬ事はない、然しそんなにせき給ふな今茶を入れるから、菓子でも喰ひながらゆッくり話すとしよう、美術家たるものによろしく氣を永くす可しだよ、何？……明朝早くスケツチに行くのだから早く寝るのだから早く話せッて、ナーニいゝさゆツクリ遊んで行き給ひ、サーそろく一話すとしようかな？……聊も僕が水彩畫をしれり始めたのは確には記憶しては居らんがそをさナ……かれこれ二三年も前だッたる一、元來僕は少さい時から繪といふものに多大なる趣味を拂つて居ッたのた、よく叔父様の本などへ安い繪具で彩色して叱かられたのを今でもよくおぼへてゐるよ、其の時分は僕の小學校では日本畫をやつて居たけれども僕にはいかにも日本畫でも物たりない氣がした、ど

たのだ、『イヤ至極最だ』君ませッかいしてはいかんよ、それではモーやめるよ何？静かに聽くから其先を話せッて、ヨシそれなら話そう、或時僕は君も知ッてるだろー〇〇君れ彼れに誘はれて上野の太平洋畫會へ行ッたのだ、ところが實に僕は喜しかッたれ、僕が今までの理想の繪を見る事が出來たのだ、其中でも君の好きな〇〇先生の水彩れだ、其間でも君の好きな〇〇先生の水彩れ實にく氣に入ッたのさ、それが聊も僕をしてこの道に志しめた動機とでもなッたのだろーよ、それからと云ふものは何にもして水彩畫を習いたいと思ッて居ッたのだ、ところが幸にも或本屋で大下先生の水彩畫葉を見付けたのだ、早速買ッて内容を拜見すると吾等初等者にもわかりやすく親切にされどは少さい時分は身が弱くツて隨分親泣せたる一君ツ、僕が先程から見て居ると菓子快でたまらなかッたよ君も其様な事が有ツばかりやらかしてはるがそれでも話しを聞いてるのか？何？聞いてるツて、面白いから其先を話せッてマ－待ち給ひ茶でも一杯の晩は屹度來給い…………サヨナラ……

寫生と云ふと何んだか大げさの様だが、實に道具と云ツても唯だ安い繪具と筆と日本畫に用ふる筆洗くらいのものさ、何ツ水か？正宗の二合入り空瓶へ入れて持ツて行ツたのだ、然し愉快だれ初めの中は隨分失敗したれ、或時は何度か筆を折り紙をさき断念しようかと思ツた事もあツた、それでも常に僕は自から心を取りなをして再び筆を取り研究する身となッたのだ、其間には随分面白い失敗談もあるよ、今でも僕は其時の事を思ひ出して獨りで笑ひ度くなることをたくさんあるよ、御蔭様で當今ではやツと繪らしいものを画く事が出来る様になつた、實に僕は感謝の念にたへんよ、僕なつたが、今はビン／＼はねすぎてかへつて困るくらいさ、それもこれも皆朝早く起きて寫生に行き、田園の新鮮なる空氣を吸ツた御蔭さ、何ツ？もうれむいから續きは明夜ゆツクリ聽くツてそれじや一明の

團隊研究

T  
N  
生

余は昨年より大いに水彩畫の趣味をさと

せん、スケツチは其儘であればこそ面白味もあり其時の感情も現はれるのであります(編者)

も。とあゝ、僕の迷霧は此の時すつかりは  
れた。

天下先生に謝す。

僕の様な感じを持つ人は僕ばかりでは無か

小学校のことなれば水彩畫等の科目はなし、されば師にたよること能ずして獨習を

## 己の特色を知れ

と思はれる、諸君、諸君の特色を知られよ、然してそれを、發輝せられん事を、

こゝろみんとて、大下藤次郎先生著の水彩  
畫階梯其他の書物並びに『みづゑ』等をもと

僕も拙い乍ら水彩繪具を、いちつて居る者

前號肉筆繪畫交換に就てのうち第二項を左

め是れらを讀むを毎月の樂みにせり、其上團隊をつくり、作品の批評繪畫上の講義等

だが、どうも僕の描いた繪はまづい様に思  
はれてならない。友人や他の人のを見れば

の通り訂正致候。

なすは大なる益ありと知り、こゝに有志者五名相會し一つの研究會を開きたり、これ秋楓會にして、日曜休日を利用して會員一同スケツチに行き、是れを清書し、各々批

何れも特色があつてよい。僕の繪はどうしてこんなに拙からう、どうかして、よい繪を描きたいものだと獨り悶へた。それでも僕の繪を友人が見て、君の繪には特色があ

二、各會員はスケツチヅック(大き中形位)の卷頭に自己の住所姓名雅號會員番號を明記したるもの一部を、第一會員は第二に、第二は第三といふ如く以下順次に發送し、末位の會員は第一會員に發送せら

問錄なるものをつくりて銘々の考を誌し、

去年の秋『みづゑ』の第二十九回繪葉書競技

るゝ事(相陽二葉)

身の経験したる所を錄す、而して吾等は此會の發達を祈りつゝあり。

會へ、何等を得るかと試に久保田榮作として匿名にて投書したら幸に十四等を得た。競技會の記事を見たら、こんな事がある。

轉居

本郷區駒込神明町十四番地

スケッチしたものな描き直すことは初學者には大禁物である、寧ろ其場處で叮嚀

久保田の諸氏は同一筆法にして、其の色も殆ど似通へり、希くは他人の眞似を

に寫すやうになさい、其時間がないのなら短い時間で寫せる簡単なものを寫生し

爲給ふ事なく、自然に向つて忠實に其の色を研究し、各自の特色を出されん事を望

## 会 告

編者より

▲其後の入會者左の如し

茨城縣水戸中學校

正 大橋三平

埼玉縣入間郡所澤町 高橋七郎

秋田縣河邊郡和田小學校内 高橋松治

尾道市土堂町二五五

贊 天野小太郎

北海道小樽區手宮町十五 梶谷茂一郎

贊 松田新

岐阜縣大垣町字儀四

贊 榎谷茂一郎

時 間 及 其 日 の 天 候

▲批評を求めらるゝ作品には、必ず寫生の

時間及其日の天候を明記致されたく候。

▲作品は極めて大なるものを除くの外、繪

を卷いて送らず板紙等に挿み送くられたく

候。

▲正會員中臺枯星氏は四月二十日死去被致

候。

▲右につき、會員一同より薄奠を醵出して

靈前に供へ、併せて其兄中臺藤吉氏に會員

一同の名義を以て弔慰を表したしと秋田の

高橋松治氏より申出有之候。

▲會員相互の幸不幸に對し慶吊の意を表す  
ることは、會員親睦の點より見るも結構の

と存候、就ては會員に限らず、中臺氏生前交際ありし諸君にして有志の方は御出金有之度候。

▲金額は便宜上金拾錢以上と定め候、郵便切手なれば三錢以下のもの、振替貯金ならば登記料金貳錢を添へられ本會へ送付有之度候。

▲期限は本月末日迄とし、本會は取纏めて全部中臺家に送付すべく、一切の手續は本會にて取扱可申候。

▲大阪地方に開催すべき夏期講習會へは、同地方近傍の會員諸君は奮て御參會有之

度、又同好者をも御勧誘有之度候。

▲徽章は本誌發行の頃出來の筈詳細は次號に

○小島氏へ珍らしき風景と拜見しました、見ないから分らぬが家の割合が大きくなりませんか、又山と前景と同一筆法はよろしからず○田中氏へ鳥居の遠近法が間違つてゐます、背景の森は粗雑、濃淡の調子は極めて不充分、鉛筆畫を稽古されたい○曉露君へ豆羽川はよい出來で冬の趣もよく見えます、横に直線が並び過た様です、棹でも畫いたらよいでせう○和賀井氏へ暖かなよい感じて、前の緑の色は結構です、家根の蔭の紫色を何とか工風されたい○鶯枝君へ色も弱いし濃淡も不充分ですが君は會員ですからちと寫生したものをお送りなさい○千葉君へ汗意深い描法ですが色が濁つてゐます、それに全體に紫色が多過ます

○夏期講習會の一部は大阪附近と定まり可

申候、講師は大橋正堯、大下藤次郎兩氏にして都合により丸山晚霞氏も出席可致候。

○前にも申上候通り、二週間の講習は三年

五年の獨習に優る事申迄も無之候、讀者諸君は同好者を誘ひ合奮て御參會有之度候。

○大阪に於ける半ヶ月の宿泊料は金六圓程度之事に候、詳細の規定は來月の紙上に掲載可致候。

△水彩畫研究所四月例會は向島百花園に於て催されたり、成績作品（研究所にて描きしものは除き）百三十點程、互選一等松浦政次郎氏の松原、二等鈴木一治氏の舟、二等赤城泰舒氏の遊蝶花、三等藤田紫舟氏の農家、小山周次氏の櫻等なりし。

○御申込のある諸君へは規定出來次第御送可申候。

## 問に答ふ

注 水彩畫に關係あるものに限る。◎の印は一般に對して利益なざものは載せず。

答 一般に對して利益なざものは載せず。

臨本によりて筆遣ひを學習するの可否（旭川S生）○筆勢といふが如きは初學者に要なし、殊更學んで得たる筆勢は價値なし、かゝると迷はず自然を眞面目に研究されだし。■ 水彩畫にては日本畫にて岩石草花等を描く時の如く、其場に從ひて筆遣ひを硬く或は軟くして其物の性質を現はすを手段とするものなりや、又絶對的に色によりて之をなすものなりや（旭川愛讀生）○『みづゑ』二十三主觀と客觀を再讀されたし、要是其者の眞を寫し感じん寫す上に於て都合よき方法に從へば可なり。■一 寫眞例題集を見カメラを以て撮影して水彩畫を描くに効能ありや、又参考となすには如何なる點なりや。■二 鉛筆畫は我流の寫生にて發達し得べきや。■三 美術學校本科の入學試験の實技は鉛筆畫なりや又は水彩畫なりや（旭川S生）○一 三宅氏の墨繪講話のは知らず、船來書にはあるべし丸善より日録をとりよせ調べられよ。■二 専門家の作を参考にして忠實に勉強せば獨習にても進歩すべし。■三 本年は木炭畫のみなりし、入學希望者は出來得べくは試験前三四ヶ月間を洋畫研究所に於て練習するを要す。■一 浅井忠氏の中學用水彩畫臨本を見るに其筆遣ひ日本畫に於ける筆勢とも云ふべきものなり。又他の人の臨本にはこの筆勢を受けず、右の筆勢といふとは水彩畫の價値を受けるに大なる影響ありや。■二 右淺井氏の如き

「水彩畫一斑」との發行所及定價 ■ 肉筆臨本の紙質は何なるや（春山生）○水彩畫一斑は日本橋丸善書店發行定價七十錢？他は未詳。■二 ワットマン紙なり。

○石井柏亭山本鼎爾氏の主として編輯せらるゝ月刊雜誌『方寸』は其第一號を去月十五日發行せられたり、菊判二倍大八頁の薄き雑誌なれ共、全部六號組にて、所々兩氏の自畫石版自刻木版等を挿み、體裁極めて瀟洒に、文字簡潔頗る諷刺に富めり。先頃廢刊せし平旦の後身とも見るべきものか、由來此種の雜誌は經營困難にして永續せざるもの多けれども、石井氏は素より營利の目的にあらねば飽迄繼續する決心なりといふ、吾人は茲に新しき思潮を傳ふべく本誌の發刊せられしを祝すと共に『みづゑ』讀者にとりても有益なる好伴侶を得たるを喜ぶ。

■一 畫真家は繪畫を學ふ必要あれど畫家は必ずしも寫眞の必要を認めず、瞬時に變ゆく雲、水の影、動く人物鳥獸の如き、寫し置きて繪の上に用ゆる事あれど、夫すら鉛筆のスケッチ程の効もなし、但参考として位置濃淡の調子等大に得る處あれど、是とてあまり初學の人には解せざるべし。■二 差支なし。○中等教員の文部省檢定試験を受くる資格は中學校卒業者に限るや又は自修中學程度にてもよきや（K.O.生）○中學校及師範校卒業以上自修者にては資格なし。■一 橋本辻永兩先生の「洋畫一斑」と小林氏の

本年夏期講習會の一部を長野縣瀧溫泉附近に開催と決し申候。講師は丸山晚霞河合新藏の二氏にして、都合により大下藤次郎氏も出席可致候、講習課目は墨繪、パステル水彩畫、透視畫法等、詳細は規定出來次第進呈致すべくに付、希望者は豫め申込有之

## 讀者の領分

意注

長文及水彩畫に無關係のものは御断り。  
◎印は編者の答「投書の要點の方を掲ぐ」

■一 「みづゑ」彩色版寫眞版とも原畫の寸法を御記入下さい。寸法面倒なら何くつ切と丈けでも二 「みづゑ」二ヶ年一大水彩畫附錄てふな事は叶ませんか、大下先生筆精巧無比といふやうな(兵庫M.Y.生)○一 二十四の口繪は四ツ切、本號は二ツ切、中の石版圖案は何れも原畫と同一大、二 多忙なとの會に金のないのとて一寸ムツカシイ事、思ひます。博覽會の繪を見て平生の文章や噂で水彩畫家を想像すると、先づ春鳥會では、大下先生はやさしい方、丸山先生は面白い方、河合先生は静かな方、大橋先生はチト分らないがまあおとなしい方、夫から三宅先生はむづかしい方、石川先生は無邪氣な方、他の先生方はとても分らない(田舎者)。諸君永く失禮、僕は四月八日にサガレン島へゆきました、ハガキ一枚出すのにも數里を行かねばならぬ不便の地ゆへ、七月下旬函館へ歸つてから盛んに交換を願ひます、サガレン附近のスケッチを差し上ます(サガレン島西海岸テモドマリ一七三號漁舎にて小島虎太郎)。諸君、東京美術學校々友會月報、平旦、光風、月刊スケ

ヅチ、明星、寫眞例題集其他地方の會の發行になる美術雑誌何號にてもよろしければ御送りを願ふ、相當の御禮は必ず致します(青森縣三月一日町五六、松尾大作)。文房堂は振替貯金で註文した品を十日経つても送らぬ、しかも一回催促をしても……不都合極まる(地方會員)。○振替貯金は普通郵便より二三日遅れて來るので鬼に角序に注意して置きませう。『みづゑ』第一と英國製水彩畫用丸形陶器パレット(價七十錢程)と交換して下さる人は下名迄、但パレットは無疵故『みづゑ』あまり傷みのないものを小樽區手宮町十五、松田新。○繪ハガキ競技會は毎月なされんことを希望す(會員の一人)。皆さんへ、自筆水彩繪葉書及リツトマン十六切の自筆水彩畫を交換して下さい、畫面に文字なき者を(兵庫縣明石郡多聞村朽木春翠)。僕の驅け出しなる、汀鷺と云ふが大下先生の別號とは知らず、菱花灣日記を読みながら先生が目と鼻の前にお出の事を知らずに居た、若し知つてゐたら是非御宿でもしてスケツチのお供でも寸御通知致します菱花灣日記は本年の旅行ではありません。『みづゑ』が來た、殆どこれが癖の痙攣的に紙幣を勘定する程度の早さで一頁一頁極く雜つと見る、それから口繪を凝と見る、すると何かしら其繪に關聯した清い美はしい思想が湧いて来る、其思想の糸を手繰りたどりて迷宮の奥深く這入り込む、それが僕には非常に樂しみだ、今度のアルハンブラなどは耐らん程僕を歎ばした(明磨)。二十四の口繪アルハンブラを見てアービングの三人の美姫を思ひ起し美しい感にうたれました(平磯の人)

△西川、久野、江口、杉浦、村田、小林、淺野等の諸氏發記人となり東京寫眞研究會なるものを起し毎月の例會には通俗的に寫眞術の講義をなし年四回撮影會を催すよしに於て會員を募集中なり事務所は東京牛込區下宮比町十、久野轍輔氏方なり

東都花名所十二月(上)丸山晚霞筆  
評

東都花名所十二月(上)丸山晚霞筆  
評

日本橋區通二丁目 松聲堂  
石版刷繪葉書六枚金三拾錢

右は其名の示すが如く名所の花を寫せし者にして濃艶を極めたり